五年生　三浦 友三

嗚呼。永遠に忘れる事の出来ぬ日は菊花薫る11月7日であります。呱々の聲をあげて僅か10年の歴史を有する一私立中学校である本校を畏しくも台臨の光栄に浴させ給ひし。

秩父宮雍仁親王殿下の御為め我等四百のただこの空間の光栄に感激恐懽背し餘り言ふ所を知りませんでした。

始め本校正門迄敷きつめた玉砂利の上をば御召自動車もにて我等の棒銃に御答礼あらせられつゝ校内に入らせられ全校生徒の教練を親しく御覧遊ばれたのであります。此の時雨模様もおさまり天晴れ秋の日は潔として輝き渡り紅葉は晴れの錦と見まがふばかりでした。殿下には終始一貫最御熱心に細心の御注意を怫はれながら御覧遊ばされ我等の目前数尺の箇所迄にも御足を進められました。私は、殿下の御眼差の強く御慈愛に富ませられて居られるのを拝してただ頭の下がるのを感じつつも台覧に供する分隊戦闘教練と小隊密集教練の参加者の一員として全精神を緊張させつゝ努めました。最後に、殿下の御直前二三歩の箇所で了へた時目のあたり拝し奉る事を得てただ涙の止めどなく溢れ出づるのを禁ずるを得ませんでした。

思えば維新の際は賊軍として敵対し奉った東北に、又打ち続く天災になやむ此の辺鄙な東北の地へ、金枝玉葉の尊き御身を以て成らせられて数多き光栄を領ち給ふ其の広大なる御徳を仰ぐ時我等は此の無上の光栄を現在のみの光栄としてでなく永遠に続く光栄として忘れざるため、なお一層の精進をなしで此の岩手を此の東北を此の日本をより良くして、皇恩の万分の一にも報ひ奉らんと決意するものであります。